

平成27年11月25日

小金井市長

稲葉孝彦様

小金井市立はけの森美術館への提言

小金井市立はけの森美術館運営協議会

会長 鉄矢 悦朗

小金井市立はけの森美術館運営協議会は、平成18年4月の美術館の開館とともに、小金井市立はけの森美術館条例第12条により、美術館における運営のあり方、事業内容、経営等について、美術館と並走しながら、諮問に応じ、多様な課題を検討してきた。

この度、第5期運営協議会委員より小金井市立はけの森美術館のこれまでの活動の評価と今後の課題を踏まえ以下のとおり提言する。

記

小金井市立はけの森美術館は、これまで、小さいながらも特色ある所蔵品を持ち、収集・保存管理をしつつ定期的にテーマを設けた所蔵作品展を開催し、また毎年、魅力的な企画展を開催してきた。さらに市内小中学校と連携しながら小学4年生の美術鑑賞教室の開催や、中学生の職場体験事業を行っている。

平成24年度の改修により新しく「多目的講義室」ができたことで、ワークショップを中心にした教育普及活動の質と量がこれまで以上に大きく充実した。特に創作ワークショップに力を入れており、市民をはじめ内外の美術ファンに親しまれてきた。美術館運営協議会としても、これを実現したはけの森美術館職員の不断の努力に大きな敬意を表したい。総体的にみても、これだけのスタッフと予算の中で美術館活動は相当に健闘していると言えよう。

一方、課題も多く残っている。人員配置の問題など、前回の提言が運営上活かされているとは言い難く、展覧会等への対外的な評価に対して楽観できるものではない。(別紙：評価と課題参照)これらの課題を解決し、より市民に親しまれ、全国的にも注目される美術館をめざして改善されたい。

1 常勤学芸員の必要性

小金井の美術、多摩地域の美術の専門家の育成が必要である。学芸員は「調査・研究」を継続的に行う必要があり、任用の規定はあると思うが任期5年では知識と経験の継続が図れない。学芸員雇用条件を、1年契約の最長5年更新から、10年契約へ変更し、学芸員の育成方針を示すこと。

2 自主企画展の必要性

企画展は美術館にとって、血液のようなものであり、所蔵作品展と企画展の双方を開催していくことは、美術館に呼吸をさせているものだと言える。新しい空気を入れないと、何も新陳代謝が起これない。ただ所蔵作品展だけをやっていけば良いという意見がもしあるとすれば、残念ながら美術館そのものの存在意義を理解されているとは言えない。財政状況が厳しいのはわかるが、厳しなりに、美術館として、確実に所蔵作品展と企画展の双方を開催していくことは新たな活力の源である一方で、美術館の使命の一つだと考える。

所蔵作品展だけではなく、全国でも話題になるような、はけの森美術館の特徴を含んだ企画展を年2回以上行っていくことは当該美術館の規模としてもしっかりとやっていくべきであろう。そのためには最低2～3年の調査、交渉、準備期間が必要なことを考慮し、それに応じた財政措置をすることが重要である。

3 運営改善の必要性

持続可能で適切な運営状態を維持するために週5日制の美術館とすることも検討すべきである。運営の課題解決を模索した結果、水～日（5日間）の開館日とし（月・火休館）、展示替え期間の休館をできるだけ短縮することで、運営面での大きな改善を見込むことができる。前回の提言でも触れているが、休館日を1日増やし週5日の開館にすれば、現行の人数でも職員のすれ違いが少なくなり、格段に運営しやすくなると思う。臨時休館等で試行してみて、良い点、悪い点のデータを取ってみるべきではないか。また、開館時間についても弾力的に対応できるよう考慮されたい。

4 広報（特にデザイン、ホームページ）の充実

市内外での認知度がまだまだ低く、はけの森美術館の存在自体を知らない人が多いのではないかと。美術館のホームページを市のホームページから独立させ、デザインも戦略的に洗練されたものにしていく必要がある。

そうして、ホームページのページを増やしてメニューを多くすることや、学芸員のブログを開設し、中村研一の生涯と所蔵作品の解説などを掲載してはどうか。また、昨今ツイッターやフェイスブックなど、広報効果の上がる方法として見逃せない SNS の活用も出来るようになり、積極的に活用することで来館者数の増加に確実につながる。また、実際に美術館に来てくれる顧客層を、聞き取りアンケートなど効果的な方法を活用し、徹底分析する。このような広報の充実の方策を考えてほしい。

■別紙添付

評価と課題

評価と課題

—これまでの評価—

1 事業に関すること

(1) 企画展覧会・所蔵作品展

・これまでの学芸員は、展覧会の開催と教育普及事業の開催の両面でよく頑張っている。両方を兼ねて、オールマイティに仕事ができる学芸員は大いに評価したい。

・助成金については、毎年よく調査し、応募書類を作成し、一般業務が忙しい中で、かなりの助成金を確実に獲得している。市の一般財源からの持ち出しがずいぶん少なくなっているのではないだろうか。これは事務職員の努力が大きい。コンスタントに助成金を獲得していることについては、美術館の運営にとどまらず広い意味での財源確保の観点からも、大いに評価されてしかるべきものである。

・内容面でも充実してきた。助成を受ける展覧会は他館と合同の、いわゆる巡回展の場合もあるが、今年度の「河野通勢と中村研一展」のように、学芸員が作品を借用して組み立てた自主企画が実現したことは意義がある。総体的に見て、これだけのスタッフと予算の中で美術館活動は相当地に健闘しているといえると思う。

(2) 教育普及事業について

・平成24年度に新しい「多目的講義室」ができたことで、ワークショップを中心にした教育普及活動の質と量がこれまで以上に大きく充実した。楽しいワークショップが多く、子ども向けだけではなく、新規に中学生以上を対象とした大人向けのワークショップも開催し、小金井市民から喜ばれ、楽しみにしている方も多い。

・平成18年の開館当初より始まった、小学4年生の美術鑑賞教室は、企画展、所蔵作品展ごとに数回開催し、当初は2校だけであったものが、平成21年度より市立小学校全9校が参加し平成26年度までに、6,880人の児童が様々な作品を鑑賞している。また、中学生の職場体験実習は、平成20年度からはじまり、途中改修工事等の影響で23年～25年は中断したものの、平成26年から再開し、毎回1校～3校、3名～10数名の中学生が学芸員の仕事を体験している。先の鑑賞教室に4年生の時に参加し、中学生になって職場体験の場所として美術館を選んだ生徒もおり、美術館の教育普及事業のつながりとしても目に見える成果となっている。

2 作品の収集、調査、研究等について

・中村研一ゆかりの絵画、資料の寄贈が着実に行われていることは高く評価できる。戦時中の希少かつ重要な作品の寄贈もあり、大きな成果と言える。今後も着実な寄贈の受け入れ、そして関

係者と関係作品の発掘を期待したい。

- ・複数年（3年または5年）ごとではあるが、年報をきちんと出版していることは評価できる。

3 運営全般・広報について

・広報は、展覧会のチラシやポスター、そして館内で配るパンフレットやワークシートなど、デザインも細やかに工夫されていて子どもも楽しく利用でき評価できる。

4 地域との連携について

- ・「おはなしのへや」は、地域文庫である「こごうちぶんこ」との連携事業で、利用する市民にも好評かつ人気があり、館としての実績ともなっている。
- ・市内小中学校図工研究会との連携、東京学芸大学との連携、その他小金井市内各団体との連携は、フレキシブルによく取り組んでおり、評価したい。また、NPO法人アートフル・アクションなど市内芸術文化団体との連携により、事業に多様な視点が加わってきている。「タマのカーニヴァル」など、団体との連携によって多彩な事業を実施できたことは評価できる。

—今後の課題—

1 事業に関すること

(1) 企画展覧会・所蔵作品展

展覧会開催後の成果を分析し、結果のデータを蓄積すること。今後、さらなる展覧会の充実のためには、アンケートなどを活用し、実際に美術館に来てくれる顧客層（カスタマー）を徹底分析する必要がある。聞き取りアンケートが効果的である。

(2) 教育普及事業について

小学校の鑑賞教室と中学校の職場体験は、どちらも地道な事業だが、長く続けることで子どもたちが成長して美術館と小金井市に愛着を持ってもらえるので、一つ一つ丁寧に、子どもたちが楽しめるように対応に当たっていく必要がある。また、市内小中学校の、図工科、美術科の教師との交流をより深め、美術館と学校教育の連携をさらに図られたい。

2 作品の収集、調査、研究等について

・「はけの森美術館の顔」が必要である。多摩地域の美術、小金井の美術の専門家の育成が重要だ。もっと学芸員は勉強する時間（勤務時間内）を取り、「調査・研究」を継続的に行う必要がある。年報との併設でも良いが、学芸員の研究論文が掲載された紀要の発行を期待する。また、年に複数回は学芸員自身の研究発表を兼ねて、関連講演会の開催を継続的に行ってほしい。

特に1950～60年代の美術、デザイン、建築文化を担った美術家、関係者が高齢になってきている。

小金井市在住の関係者の話を聞き取るなど調査を進めると共に、企画展を開催するなどして作品、アーカイブ、資料の収集などにも努めていくことが重要である。

3 運営全般・広報について

(1) はけの森美術館へのアクセス表示等について

- ・美術館までの標識が少なく、徒歩で来館する方は、行程の途中で迷ってしまうことが多い。ポイントごとに美術館の標識を設置するなど、わかりやすいアクセス表示をする必要がある。
- ・美術館に来館する方は市内に限らず広域であるにもかかわらず、美術館専用の一般来館者用駐車場を有していない。(障がい者用としては一台分あり) 高齢社会への対応などへの配慮も必要である。その一方で、はけの森美術館の立地は緑地等を含め研一が住んでいた当時の貴重な付まを残しており、ハード面の整備については物理的に大きく制約を受けるという側面もあるため、それらを十分に配慮の上、車での来館にかかる対応やルールについて、検討する必要がある。

(2) 入館者の増大とマネジメント

- ・展覧会の入館者はまだまだ少ない。企画展で1日平均50人以下、所蔵作品展で20人程度である。もう少し増やすことは可能だろう。これを少しでも増大させるために職員が一致団結する必要がある。併せて、収支を含めたコスト意識を職員全員が持つ必要がある。

(3) マスコミ、ミニコミ戦略

- ・内容と送り先を精査の上、プレスリリースの充実を図る必要がある。
- ・館長、顧問、学芸員、そして運営協議会委員も含めてはけの森美術館の招待券を携行して、画廊や美術館を回り、また手紙を書き、美術関係者、新聞記者、評論家など美術関係者に普段から宣伝して回るというような取り組みも考慮されたい。

(4) 茶室の有効活用について

- ・茶室「花浸庵」は画家中村研一と、建築家佐藤秀三のコラボレーションによる貴重な建築であるのにも関わらず老朽化により、現在活用されていない。朽ち果てないうちに、修復工事を行い有効活用できるようにすることが急務である。

4 地域との連携について

- ・地域との連携実績である「おはなしのへや」については現状に満足せず、今後、学芸員の創意と工夫を、事業にさらに融合させ、美術館と地域との連携が、より深まるような発展を目指していく必要がある。
- ・他団体との連携事業は、美術館の主体性と共に日常的な信頼関係の構築と維持が大事なので、途切れることなく今後も定期的に継続していく必要がある。
- ・地域の芸術文化活動等の団体、市内在住のアーティスト、東京学芸大学などとの連携により、事業に多様な視点は加わってきた一方で、美術館としての主体性が今一步な感がある。この活気を損なわないためにも、美術館の主体性と特徴をもっと発揮できるよう検討していく必要がある。市内画廊との関係も含めて、関係機関とはよい関係を築き、将来的には美術館主体で関係機関に協力を仰ぐ事業につながることを期待したい。